

ロバート・カーティスはフェルディナンド・マルコスとの金の探索に  
関係したことで大きな代償を支払った。しかし、カーティスは頑固に戦  
後明るみになる日本軍の財宝地図の唯一のフルセットを、今でも持って  
いた。

ゆっくり自分の転落人生を元に戻そうと、彼はスパークスからラス・  
ベガスへ転居し、そこで大きなシボレー販売特約店の販売部長になった。  
暇なときに、彼は地図を調べ、ゴードン・リリーの地図製作者が暗号  
化した謎の多くを解明し、次に（次があればの話だが）どのようにして  
金塊回収に取り組むかを決定した。

だから一九七八年のある日、電話が鳴った時、彼は自分に幸運が巡っ  
て来た事をなかなか信じられなかった。信頼している彼の知人が、カー  
ティスに外国の外交官と会うように依頼してきたが、その外交官の政府  
は、フィリピンで、大掛かりな秘密の戦争金塊の回収に対する支援を望  
んでいた。

待ち合わせの場所はラス・ベガスホテルで、カーティスは西の大国の  
「首相」と直接の接点を持った。「首相」は潜水艦を含むすべてを準備  
しており、半々で山分けしようとして出てきた。我々が、その国の名前  
も、首相の名前も明かさないとという条件で、カーティスは以下のことを  
詳しく話した。

（訳者注、参考までに、当時の日本の首相は福田(十二月まで)、と、大  
平だ。）

「首相」は初期のマルコスの金回収活動も、カーティスが演じた重要  
な役割についてよく知っており、カーティスに、潜水艦による深夜の金  
塊回収に適した場所を選ぶよう依頼した。カーティスはコレヒドール島

を選んだ、そこに3ヶ所の大きな貯蔵所があることを知っていたからだ。

国際的な紛争を避けるため、首相直属の海軍は、部下を海辺に配置し  
て貯蔵庫を開ける様なことはしなかった。なぜなら、海辺に配置するだ  
けで部下は逮捕される可能性があるからだ。一台の巡洋艦は南シナ海の  
国際水域のルソン沖に停泊した。その潜水艦は海岸にかなり近づいたが、  
特殊部隊がゴムボートを出し、海岸から金の延べ棒を回収する夜まで水  
中に潜ったままだった。貯蔵所を開けるのも、金塊を海岸に運ぶのもカ  
ーティスマかせだった。

マルコスはなおも権力を持っていたので、カーティス自身はマニラへ  
行けなかった。なぜなら彼は逮捕され、殺害されるだろう。そのかわり  
に、彼は数人の部下を送り金塊を発見させて海岸に金塊を運ばせること  
にした。そして彼の部下たちは潜水艦から送り出す事が出来た。

「これはわくわくすることだった」カーティスは我々に言った。「私  
はマルコスには腹を立てて  
いたから、これで五分五分にな  
るわけだ。でも、その辺の事  
情については、決して話すこ  
とはできないだろう。」  
金持ちになることで、多くの  
傷は癒されるであろう。

「私はコレヒドール島の南  
端を選んだ。そこはオタマジ  
ヤクシ型の島の頭部にあたる  
とこだ。と言うのは、潜水艦  
には海が深く都合がいいか



らだ。大変狭い海岸に向かって断崖を下りるため、私の部下たちはふたつの峡谷のひとつを横断しなければならなかった。」

満潮時に海岸は水面下に沈んでいるので、いいタイミングをはかることは、非常に重要なことだ。特殊部隊がゴムボートで近づくには、月の光がない夜で干潮時である必要があった。

コレヒドール島はマニラ湾の入り口で、バタン半島沖にあった。バタン半島のマリベレスにマルコスは避暑用の宮殿を持っていた。島は東西に広がり、西側のオタマジャクシの頭の部分をトップサイドという。低地で東側のしっぽの部分は、ボトムサイドと呼ばれた。コレヒドール島の住人はボトムサイドのサン・ホセの町に住む6人だけだったが、毎朝観光船がマニラから到着する。

狙いの場所として、カーティスは旅行者用に踏み固められた小道のほずれにあるモルタルの砲床、クロケット砲台の下にあるコンクリート製の防空壕を選んだ。アメリカ沿岸警備隊は、千九百一年にこれらのモルタル砲床を建設していた。コンクリートの厚板の下に、交差するふたつのトンネルが最初は軍用品の倉庫として使用された。

千九百四十二年のバタンとコレジドール防衛戦の間に、一斉射撃によるクロケット砲台への直接の着弾により、火薬庫は吹き飛ばされ、多くの防空壕が破壊された。日本軍が支配権を手にした後で、秩父宮は破壊された砲床の下のコンクリートに裏打ちされたトンネルを見て、そこに金の延べ棒（六十五ポンド、約三十kgのバー）を隠すことを決め、六フィート（1.8m）の厚みのコンクリートで覆い、元のままの砲床に見えるようにした。クロケット砲台が爆破されたことを誰かが覚えていたことなどありそうもなかった。

冶金化学者として、サーマイト（テルミット）を十分に強化できれば、

それを使ってコンクリートの厚板に人間サイズの穴を焼ききることが出来る、とカーティスは考えた。サーマイトはアルミニウム粉と酸化鉄粉が等分の簡単な化合物である。ひとたび着火すると、大体三千 ぐらいてで燃焼する。サーマイトは第二次世界大戦の間、焼夷弾としても使用された。今日では、サーマイトは防壁を貫くため、あるいは熱感知ミサイルに対する熱おとりとして使用される。

サーマイトを着火するのはかなりの熱が必要だ。最も簡単な方法は、線香花火を着火するためのマッチを使うことだ。それはサーマイトを着火させるに十分な熱で燃える。

ネヴァダ砂漠で、カーティスは六フィート厚さのコンクリート厚板を使ったテスト台を手配し、普通のサーマイトでは時間がかかり過ぎることを確認した。彼は他の配合物を加え、サーマイトを強化して、五千近くで燃える化合物を手に入れた。「こいつは、四十分で六フィートの厚みのコンクリート板を焼き切り、一人の人間が這って入れるだけの大きな穴を開けることが出来た。」と彼は言った。

カーティスは二人の男だったら金塊を発見し、浜辺まで運ぶことが出来ると思った。彼は二人の男を知っていて、二人はこの仕事に適任のようだったし、彼らはやる気まんまんだった。二人とも“ボー”グリッツ工大佐と特殊部隊にいたので、カーティスは、彼らなら何とかやれると考えた。

「一人は大柄の男くさい軍人タイプだった。ラスベガスの大会社で保安部の主任だった。彼には、ラスベガスの元保安官の息子で似たような経歴の友人がいた。」とカーティス言った。

彼らをゲリーとマイクと呼んで置こう。二人は強化したサーマイトの使用法を学ばなくてはならなかったし、峡谷のあちこちを何度も行き

来し、浜辺まで金塊を何とか運び出すことが出来るよう、肉体的に強化する必要があった。この仕事のために、カーティスは馬具職人に二つの頑丈な金の延べ棒をかたどったリュックサックを作らせた。何週間にわたる激しい訓練の末に、ゲリーとマイクは、一度に2本の金の延べ棒を何とか運べるようになったと判断した。強化サーマイトが入ったふたつの二十五ポンドのバッグは、たくさんの予備を持っていったんだろう。サーマイトは発火装置なので、飛行機では運ぶことはできなかったのだから。そこで、特別強化混合物は外交文書用の封印ポーチに入れられてマニラに運ばれた。

ゲリーとマイクは、コレヒドールの熱帯雨林の小さな所で2週間生きるのに必要なすべてを集めた。つまり、マシエティ（なた）、食料と水、ハイテク寝袋、防蚊ネット、薬、コブラ毒血清などである。二週間あれば、金の延べ棒を運び出して、西の大国の首相を満足させれるはずだった。

フリピン入国の口実として、カーティスはゲリーとマイクが、福音伝道の任務にはじめて就くモルモン教の伝道師であるという人物証明書を手に入れた。二人は飛行機でマニラに飛び、安全な外交エリアである大使館邸に泊められた。

二人は調査のため、コレヒドール行きの遊覧船に乗った。砲台付近には彼らが考えたとおり、人はいなかった。他の観光客と一緒にマニラに帰り、二人は道具類を集め、外交官にボタンまで車で送ってもらった。そこはコレヒドール島の向かいにあるカブカベンと呼ばれる港町で、二人は明るく塗装されたアウトリガー（船外浮材）と、手ごろサイズで、船外モーター付のフリピンの小船であるバンカを借り、雇われ船長なしで小船を使うよう高額の前金を払った。二人の道具類を積み込んだら、バンカは荷物の積み過ぎのようだったが、そのオーナーは大丈夫だ

と保証した。二人はオーナーにはキャンプに行くのだと説明した。

潜水艦で彼らを浜のほうまで運ばせ、ゴムボートに乗せたほうが賢明だったろうが、ある理由でそれは考えられなかった。

暗くなる1時間半前に、ゲリーとマイクは目的地のコレヒドール島へ目盛を適当にセットし出発した。そこに着くには一時間かかった。彼らは漁師のように海上を動き回り、闇がやって来た時、急いで海岸に向かった。

ゲリーとマイクは兵士であって船乗りではなかった。彼らは海にについては殆ど知らなかった。漁師なら誰でもソッド法を知っている。状況が悪くなるなら、それは悪くなるのだ。（マフィーの法則のことだ。）

マニラ湾からの流れる強い潮があるから、彼らは目的地へまっすぐ向かうべきではなかった。彼らは潮に向かって進むべきだったし、潮に彼らの目的地まで運ばせるべきだった。マニラ湾の入り口で潮に逆らって進むことは、船外機のモーターでは大変なことだとわかった。しかも、モーターが動かなくなってしまう。バンカは南シナ海の大きな波のうねりで遠くまで流され、彼らは必死にモーターを再起動させようとした。いくつかの碎ける波が、船べりから彼らを襲った。彼らの低い幹舷を水あぶくだらけにした。

殆ど彼らを水浸しにし、リュックサックもサーマイトも流れ去ってしまった。このエリアは悪名高い鮫が、大都会マニラからどつと流れてくる犬の死骸や生ゴミをあさって食べるところで、二人の男はひどく怖かった。ボートを軽くするため、彼らは装備の残りを捨てた。

幸運にも、その時モーターは息を吹き返した。彼らはバンカをターンさせてボタンへ引き返すことが出来たのだった。

真夜中過ぎ、彼らはよるめくように浜へたどり着き、電話を見つけ、ネヴァダにいるカーティス呼び出した。

カーティスはびっくりし、そしてがっかりした。彼は仕事を打ち切ろうと主張したのだが、ひとたび陸地に戻ったゲーリーとマイクは、恐怖から快復しつつあり、面目を保つことを必要とした。

彼等は星型ドリルと大ハンマーを使いコンクリートの厚板に穴をあけようと主張した。カーティスはうまくいかないことを知っていたが、ゲーリーがどうしても主張し、しぶしぶ承知した。ゲーリーとマイクにとり、シヨックと失望がとて大きかったため、外交官がより強化されたサーマイトを運んでくる間、二人がおとなしくしていることはできなかった。

マニラに帰って、ゲーリーとマイクは新しい備品と道具を買い、ふたたび手数のかかるバンカを借りた。今度はバンカをコレヒドールに向けたのである。カーティスが予想したように、コンクリート板に穴を開けることは絶望的だとわかった。2日間で彼らはたった3インチの深さの穴を開けただけだった。彼らは再びボタンからカーティスに電話をして、もうお手上げだと言った。カーティスはワシントンの大使館に電話をして首相に言葉を告げた。ボタン沖に潜水していた潜水艦は母港に呼ばれた。

すべての金塊回収の努力が失敗に終わったわけではない。うまくいった発見は千九百八十年台にたまたま起こった。日本人グループはよく組織されており、秘密をしゃべらなかったので、彼らの情報管理対策は良かった。ひとつのグループは、我々がトシと呼んだ東京郊外に住む一人の男に率いられていた。彼は戦争最後の年にゴールデン・リリーに従事した諜報員で、その時、彼は20代前半であった。トシは自分の名前を

明らかにしないという条件で彼の情報を話した。

一九四四年から千九百四十五年にかけて、彼は秩父宮、三笠宮、竹田宮、南京事件の虐殺者である朝香宮鳩彦(やすひこ)と、しばしば一緒にいたと言った。トシはベン・バルモアが皇子の所へ、お茶や紙巻タバコを運んでいるのを見たと言ったし、その間、彼らはゴールデン・リリーの場所を見て回っていたのだ。戦後、トシは大学に戻り、父親からの財産を相続した。ハンサムで国際人、英語もフランス語も堪能なトシは、隠匿を手伝った金塊の回収に生涯をかけようと決意した。彼はマニラ郊外の庭付きの小さな家を買ひ、ひたむきな熱心さと、完璧な秘密主義で、彼の回収作業にとりかかった。彼の息子が大学を卒業すると、東京での金ビジネスを開業させた。

一九八一年に、トシはサンタ・マリア連山の金塊貯蔵所から大量の回収をした際、マルコス大統領と関与した日本人グループの中の一人だった。その金塊はジョンソン・マセイ ケミカル社により、マルコスが一九七五年にカーティスから盗んだ設備でこしらえた精錬所で処理された。マルコスが一九八三年五月に、ルクセンブルグにある一流の国際銀行を通して、多量の金塊を売った時、トシは自分が回収した金塊も含まれていると言った。

最初の販売分だけで七十一万六千四百五本の金の延べ棒で、売価は千二百四十億ドルであった。取引は、仲買人を代表する大勢の弁護士により署名されたが、彼らはロンドン金プールのメンバーだった。フィリピン大統領のレターヘッドのついた便箋に書かれた合意の覚書は、マルコスカが信頼した金塊を扱う婦人の一人、コンセハラ・カンデラリア・サンチアゴによって署名されていた。(CDを参照)

これらの書類はアメリカ領事により公証され、彼は書類を写真コピーしてCIAに手渡した。取引での手数料を払ってもらったノーマン・トニー・ダカスによると、週に六十トンの金塊がクラーク基地から米空

軍の飛行機で香港へ、運ばれた。最初の運搬分だけでも、マルコスがこれまでに行った最大級の取引のひとつだった。

トシはルクセンブルグの取引から分け前を使い、日本で不動産を購入した。いろいろ購入したなかで、彼は東京郊外の鉄道駅の向かいにある高価な土地を購入して大きなアパートを建設し、その最上階には親族の全てを住ませた。そして、その他の階をすべて賃貸にした。彼はアメリカに旅行をして、フィルター・キング・プラスを含む、地中の金属を探查する電子機器や地中スキャナーを購入したが、手の切れそうな新しい百ドル札の大きな札束から全ての代金を支払った。

親切でのんきなトシは、いろいろな住居の前にいる自分が写っているカラー写真を取り出して満足していた。我々はこれらのカラー写真の幾枚かを持っているが、その複製を作れば必ずトシが誰かを特定することができるだろう。

おまけに沖での発見もあった。一九七六年、カーティスは中国沖に沈んでいる偽の日本病院船「阿波丸」を引き揚げて金を発見しようとするアメリカ人グループと接触した。「阿波丸」は一九四五年四月に米軍の潜水艦「クイーンフィッシュ」に沈没させられた。潜水艦の艦長、チャールズ・エリオット・ローリン司令官は軍法会議にかけられた。というのは、日本はチャールズが本物の病院船を沈め、死んだ二〇〇九人は殆どが患者だったと主張したからである。(ただ一人の生存者は読み書きの出来ない甲板員で、潜水艦に救助された。)

戦後、阿波丸が偽の病院船で、軍需品や木枠に入れた戦闘機、重要人物の家族を南太平洋へ運び、戦争略奪品や、重要人物を日本に運んでいたことを示す記録が発見されたときに、ローリン司令官の正当性が立証された。

実際、沈められた時には、阿波丸は五十億ドルの価値のある財宝を運んでいた。阿波丸は四十トンの金、プラチナ十二トン、十五万カラットのダイ

ヤモンド、多量のチタニウムや他の戦略的物質を載せていた。

飛行士、スコット・カーペンターとチャールズ・リンドバーグの息子であるジョン・リンドバーグは海軍公文書の中で、沈没はどこで起こったかを正確に示している潜水艦の航海日誌のコピーを見つけ、さらに、当時も健在であった潜水艦の上級職員と共に、その事実を確認した。

沈没船は中国の領海の近くに沈んでいたもので、中国政府と取引をし、共同事業を実行し、回収された財宝を山分けにしようとしたが、うまくいかなかった。彼らが自分たちで引き揚げ作業を始め、場所を正確に突きとめた時、彼らは中国海軍によって場所から追い払われた。中国政府はそれから回収作業を独力で行ったのだ。

もっと面白い発見はオランダ客船、オブ・テン・ノート号の発見である。ジャワ沖でのこの船の捕獲は五章で述べられている。この船の名前は天王丸・氷川丸などと数回にわたり変えられた。オブ号は戦争の後半にはゴールデン・リリー作戦の業務につくため、病院船として時を過ごし、マニラ・横浜間で財宝を運んだ。戦争が終わる直前に、オブ号は二千万の金を積んで横浜に到着した。数日後、オブ号は日本の西海岸にある舞鶴海軍基地に移された。舞鶴は殆ど陸地に囲まれた湾なので、そこに沈められたどんな船も、強い海流や津波により動かされなければ、沈んだ場所の近くに残るということを意味していた。

そこでオブ号は、海軍基地付近の丘にある地下壕からさらに多くの財宝を積み込んだ。ある夜の遅い時間に、オブ号は湾内に引き出され、船長と二十四人の乗組員は殺害され、船はキングストン・バルブを開けられ、船体は水にあふれた。殺害者たちは日本海軍の高官グループで、この財宝を自分たちで保持したいと願っていたのだ。彼らは、いつの日か帝国海軍の力を再構築するために財宝が使われると自慢げに言った。

一九八七年、オブ・テン・ノート号の回収作業は、この高官グループの残った生存者たちが、やくざの黒幕で、一九三〇年代から一九四〇年代に兎玉と仕事をしてきた笹川に近づいた時に出だしてつまづいてしまった。笹川はその後、インドネシアとフィリピンで、スカルノ大統領やマルコス大統領と協力して財宝を回収することになる。

水中の回収専門家と、深い潜水に必要な機材が苦勞して集められた。しかし、笹川の分け前をめぐる争いが原因で話し合いは決裂してしまった。

一九九〇年にモリチョー社製の巨大な海上用起重機を所有する日本の大企業も参加して回収作業は再開された。またしても、深海の回収作業における国際的な専門家が集められた。

彼らはデイヴィコン・インターナショナル社所有の潜水艦を用意し、トレンス・タイド号と呼ばれるオーストラリア製の回収船に積み込んで運んだ。トレンス・タイド号は、シドニーにあるタイドウォーター・ポイント・ジャクソン・マリナー・P.T.Y社に所有管理されていた。(C.Dのカラー写真を参照) 回収作業の参加した者は我々に言うには、「財宝は無事にトレンス・タイド号に積み込まれ、参加した日本人がその晩、お祝いに海岸でお祭り騒ぎをしていた。

彼らが騒いでいる留守中に、そのオーストラリア船はこっそりと錨を揚げ、財宝を積んだまま公海へ出て行ってしまった。船がいなくなったと判ったのは日の出前のことだった。」と語った。

この三〇年間で良く知られた財宝ハンターはジョン・シンググローブ將軍のニッポン・スターグループで、P.M.F.Sのエンタープライズ組織のひとつである。シンググローブは太平洋戦争の終わり近くに、パラシュートでハイマン島に降り、日本軍の強制収容所から数百人の連合軍捕虜を解放し、国民的英雄となった。その後、彼は毛沢東が中国本土を制圧した時、韓国で身を隠しチャイナ・カウボーイの一人になった。

シングローブは、数十年の間軍事独裁政権をバックに、とりわけ芳しくない評判をたてられた韓国C.I.A.(K.C.I.A)の設立に関与していた。シングローブは長いC.I.A勤めのなかで、テッド・シャクリーやクライン、ランズデールを含む、全ての最も有名な冷戦主義者たちと一緒に仕事をした。一九七〇年代に彼は、韓国におけるアメリカ軍最高軍司令官であったが、その時、ジミー・カーター大統領といくつかの世論に対する基本的な意見の相違があり、彼は早期退職を余儀なくされた。

彼は極右ではヒーローのまま、世界中の血で汚れた体制を支援するP.M.Fの軍補助的代理人の一人だった。ランズデールやクラインのようなエンタープライズにいる彼の元C.I.Aの仲間たちは、一九四〇年代のサンタ・ロマーナの回収、一九七〇年代のマルコスの回収について全てを知っていた。

マルコスが権力を剥奪された後、ニッポン・スターとフェニックス調査会社と呼ばれる二つのP.M.F.sがマニラへ金塊探索のためにC.I.Aの情報と協力をもとにやって来た。ニッポンは香港で法人化され、フェニックスはロンドンで法人化された。リベリアに登録されているヘルムツト貿易と同様、両社はコロラドに拠点を置き、フェニックス・アソシエイツと密接につながっていた。フェニックス・アソシエイツは「未来の兵士」マガジンの発行人で、シングローブと親密な友人で隣人であるロバート・ブラウン大佐によって設立されている。

シングローブは言った、「本来なら、埋蔵財宝の回収計画に関心など持たなかっただろう。しかしニッポン・スターグループは愚直な海岸の物あさりではない。そして、私は過去の経験で、フィリピンに埋蔵される日本の金塊の話は本物だと知っていた。」彼は付け加えた。「本当のところ、マルコスの百二十億ドルの財産はこの財宝に由来するもので、ア

メリカの援助を掠め取ったものじゃない。しかし、マルコスは一ダースやそらの最大の埋蔵場所からピンハネをしようとしただけだった。だから、百以上の埋蔵場所が手付かずの状態に残っているんだ。」

シングローブは、ニッポン・スターが取り分の1%を彼の「世界貿易国内委員会」に与える事と引き換えに保安顧問になった。

一九八〇年代半ばを通し、多くの新聞記事は、ニッポン・スターが行ったフィリピンでの財宝発掘作業が幸運に恵まれず、失敗したことを明らかにした。

発掘失敗が続いたため、彼らの資金支援者たちは、ロバート・カーティスを呼ぶことを提案した。

一九八七年一月の初め、カーティスはシアトルのアラン・フォリンジャーという名の人物から電話を受けた。フォリンジャーは「フィリピンの財宝」についてカーティスと会って話したいので、翌朝ラスベガスへ行きたいと言った。

「それをどうして知っているのだ。」とカーティスは言った。

「私はジャック・シングローブやニッポン・スターと一緒に仕事をしている。」とフォリンジャーは言った。

「君らはCIAだろう。私には興味のない話だね。」とカーティスは言って、受話器をたたきつけた。

翌朝、カーティスが九時前にシボレー販売代理店に仕事で到着した時、彼のオフィスに、二人の男、フォリンジャーと彼の次席のジョン・デンバーが待っていた。

彼らは、実際はニッポン・スターと共同事業をしている、デンバーのフェニックス調査会社と呼ばれる団体であると言った。後にカーティスが言うには、フェニックス調査会社はCIAの隠れみみであり、フォリンジャーは本当はマニラのマグサイサイビルにあるCIA局の管理長

かオフィス・マネージャーだったのだ。彼はCIAの局長ではない、局長は一等書記官か、普段は使節代理が就くことになる大使館の別のポストである。

カーティスは彼等をショールームの外に放り出そうとした時、フォリンジャーが時計を指差し、「3分以内に国防総省の電話交換台から、たいへん重要な電話を受けるだろう。その電話で、これがどうしてこんなに重要なかを説明されるだろう。」と言った。

9時きっかりに電話が鳴り、カーティスは陸軍補口バート・L・シュバイツァーと話すことになった。シュバイツァーは、ホワイトハウス近くのエグゼクティブ・オフィス・ビルにある国家安全保障会議（NSC）で、レーガンの上級軍事顧問をしていた。一九八六年、イラン・コントラ武器スキャンダルが発生した時、現役勤務から退き、エンタープライズ組織でシングローブの仕事に加わった。しかし、彼はまだNSCのビルに事務所を持っており、レーガン大統領が軍事面で助言を求める人物であり続けた。

シュバイツァーはNSC時代の副官、ディック・チルドレス大佐を通じてNSCと関係を持っていた。ディック・チルドレスは極東担当大臣の地位にあった。この集団には他の人間として、防衛情報局の元局長ダニエル・グラハム將軍、統幕事務局の元会長ジャック・ベッセイ將軍、ジョージタウン大学の戦略研究センターを率いる元CIA副長官レイ・クラインなどがいた。

カーティスが言うには、シュバイツァー將軍は、いまエグゼクティブ・オフィス・ビルから電話をしていると彼に告げた。シュバイツァーは、レーガン大統領は（隣の部屋にいる変な老人だが、）フィリピンの戦争略奪品の回収をしようとするニッポン・スターとフェニックス調査会社の取り組みを是認しているという。ホワイトハウスとCIAは否認権を維持しなければならぬので、レーガンはその計画に公式の認可を与えることがで

きないが、シュバイツァー將軍が言うには、スーピック湾海軍基地とクラーク空軍基地の司令官に加え、前もってマニラのアメリカ大使館にも指令が十分に伝えられている。司令官たちは兵士・ヘリコプターの形で支援をし、地中の防空壕の中の金塊の保管を引き受けたのだという。シュバイツァーはカーティスの愛国主義につけ込み、シュバイツァー、フォリンジャー、ヴォス、そして他の大物たちと香港で会うように急ぎ立てた。まさにその朝、レーガンはコーリー・アキノ大統領から、「100%協力する」というメッセージを受け取っていたとシュバイツァーが言った。

カーティスはジョン・バーチ協会や、マルコスや、バーチャーズと共謀しているアメリカ政府機関にはひどい煮え湯を飲まされていたので、こうした連中の誰とも何もしたくはなかった。

一九七五年以来、彼はフィリピンからマルコスの金塊を動かす際の、CIAとエンタープライズの関与について多くを知っていた。彼はこうしたことの証明を満足するだけの数千ページの書類を集めていた。彼はふたたびひどい目に遭わされるのではないかと不安な気持ちを抱いた。しかし、彼は愛国主義者であり、もしこのことで彼が経済的に立ち直ることが出来るのであれば、リスクを冒す価値はあった。

少なくとも、彼は將軍たちが言うべきことや、レーガン大統領が將軍を通して言わねばならなかった事を聴くことができた。カーティスはしつこく同意をして、一九八七年二月十一日、香港のマンダリンホテルにチェックインし、そこに連中が待っていた。

四日間彼らはホテルの会議室で会い、一緒に食事をした。カーティスは今回、自分を守るため、会議のはじめから終わりまでの全てを録音すると主張した。(彼は全てのテープのコピーを我々に渡しており、以下に述べる多くのことを我々は知ることができた。)再び騙されないよう、カーティスは自分のパートナーとしてデニス・バートンを連れてきた。

彼は国内税収サーピスの主席犯罪調査官だ。もし、誰かがカーティスは今回間違つて告訴されることはないと保証するとしたら、それは、バートンだろう。

週の終わりに、彼らのもとにオロフ・ジョンソンが参加した。彼はスウェーデン人の霊能者でカーティスが絶対必要だと考えた人物だった。

会議が始まった時、シンググローブは仲間に自分たちの最大の危険は、日本に略奪された国々が、戦争略奪品のこれ以上の回収を真の所有権が確立するまで、世界裁判所に凍結をさせるべきだと結束することだと言った。

合計三十二カ国が、数千トンの金塊を収奪されたと主張していると彼は言った。彼はどこでこれらの数字を知ったかを言わなかったが、彼のグループは、一般国民が見ることができないアメリカ政府の書類を見ていたのだ。

カーティスが驚き、怒り、失望したのは、シンググローブがニッポン・スターへの資金援助を、ジョン・バーチ協会に引き受けるよう説得していたことだ。

フォリンジャーにカーティスを引っ張り込ませたのは、ジェイ・アグニューの息子のダンだった。フォリンジャーのカーティスへの最初の電話は、シアトルのアグニュー法律事務所からのものだ。このことは全く奇妙なことで、一九七五年に経済的に、そして職業的にカーティスを破滅させ、彼を刑事罰に追い込んだのはアグニュー家だったのだ。それは十二章で述べた通りである。カーティスを破滅させていたが、アグニュー家は、もしシンググローブとフォリンジャーがカーティスを仲間に組み込み、彼の地図と分析技術を活用できれば、ニッポン・スターのフィリピンでの回収作業に資金援助するだろうとシンググローブに伝えた。

「アグニューは俺の人生を台無しにしたんだ、」とカーティスは言った。「そのくせ奴らは俺の助けを求めろ。あなたたちは、そんなことを許せる



と思うか。俺は20世紀最大の犯罪者、もしくはそんな意味の言葉で呼ばれてきたんだ。もし、それでも協力するなら、俺は本当に大馬鹿野郎だ。一九七五年にフィリピンから帰ったときまったくの無一文だったし、現在も無一文のままなんだぞ。」

シングロープ、シュバイツァーの両将軍は、香港のマンダリンホテルでカーティスと取り組む間、アグニュー家の関与をごまかしていた。

彼らはカーティスに、大掛かりな回収をするための最良のチャンスを出しているのだと言った。その回収には、レーガン大統領、アメリカ政府がずっと支援しており、アメリカ大使館やスービック基地やクラーク基地の司令官も支援している。それ以上の事はできないだろうと、彼らは言った。この連中は大物たちである。それは力強い口調だった。一九七五年、全てのアメリカの組織は大型のマックトラックのようにカーティスに迫り、同じ組織が、秘密の地図と特別の情報を伝えるよう、路上轢死動物のようにこびへつらい、強く要請をしてきた。カーティスは気分が悪くなったが、ここまで来た以上、しぶしぶだがその成り行きを見てみようと思った。

彼はとりわけシングロープは好んだが、彼らをみんな馬鹿だと思った。シングロープは先の一三カ月間に、二百万ドル以上を使い、数ヶ所で財宝回収を試み、失敗したことを認めた。彼は、二人の案内人、ドクター・シーザー・レイランというフィリピン人歯科医とその親友ポール・ジーガに、問題の場所へ案内してもらった。二人はニッポン・スターに信頼できるものだと言張して地図を与えていた。カーティスは地図を見て、すぐにそれが偽物だとわかった。カーティスはポール・ジーガと一九七五年に仕事をしたことがあったし、ジーガが戦中からの日本の財宝の埋蔵場所について直接情報をいくつか持っていることも知っていた。しかし、レイランを信頼することは全くなかった。もし二人が一緒に仕事をし、こんな偽物の地図を悪用したとすれば、彼らはお人よしの将軍を簡単にだましていたことにな

る。しかし、二人のアメリカ人の将軍に、おまえらは馬鹿だと、どのように伝えるというのか。

アラン・フォリンジャーはまじめで三〇台半ばの見栄えのする、かなり教養のある男であるが、彼はカーティスに言った。「最初の我々の作戦は、海の下の我々が支配している小さな埋蔵場所から個人な財産を探り当てることだ。そして、その中から金の延べ棒を一本取り出して、コリー（コリー・アキノ大統領）に見せることだ。そうすれば、我々は他の埋蔵場所についてアキノ政府の十分で完璧な探索と回収の許可を得るはずだ。」

問題はこの場所が、カリタガン湾の礁にあるアンカー地域だとカーティスが気付いたことだった。ジーガとレイランは、数年にわたりだまされやすい人々に、ブルックリン橋を売るかのごとく、情報を不当に売りつけていたのだ。

この二人の詐欺師たちは、無垢のプラチナで出来た錨が、日本海軍港の突端から押し出され、金の延べ棒がまった銅箱を鎖で繋ぎ礁に沈めると主張した。カーティスはこれが嘘だと知っていたが、自分たちは二人組みの詐欺専門家に騙され、金を巻き上げられていることを、冷戦主義者ジョン・シングロープのような男に言うすべを知らなかった。

ニッポン・スターのダイバーが礁で何も発見できなかった時、ジーガは、錨と銅箱は「岩の裂け目に滑り落ちたに違いない。」と主張した。財宝を覆っている日本軍のコンクリート厚板は硬くて突き破れないし、潮の流れはニッポン・スターの潜水台を動かし続けたと投資家達に説明をした。

あるとき、カーティスは将軍たちに錨の場所について騙されていたと認めさせ、彼らが仕事をしている陸上の場所について教えるよう強く求めた。将軍等はカバイトはずれの町であるアルフォンソのこの場所へ、シーザ

「レイランに連れてきてもらっていた。レイランは財産家だ。フォリンジャーがそのことを述べた時、カーティスは自分の耳が信じられなかった。レイランはニッポン・スターに、自分が少年のとき日本軍が隣家の下に掘った深い穴に財宝を隠すのを見たと言っていた。その家もまたレイラン家の所有だったのだ。のぼせ上がった將軍たちは、レイランに多額の月々の情報料をあたえ、掘り始めたのだ。何も見つけられなかった時、穴はもっと深かったと考え、さらに掘り続けた。一三カ月以上かけて、台所の下をまっすぐ四百フィート掘り下げ、泥を袋に詰め、夜にそれを運び去ったので、多くの隣人は何が起こっているのか知る由もなかった。この時までには將軍たちはかなりの金を使っていたので、あきらめることは出来なかった。地下水位は百フィート下だったので、次の三百フィートは海面以下を掘らなければならず、將軍たちはアメリカ海軍から深海専門のダイバーを連れてこなければならなかった。そうした深さでは、ダイバーたちは上に上がる度に、減圧室を使わねばならなかった。」

「想像してみろよ。」とカーティスはいった。「六フィート、六フィートの縦抗を三百フィート以上も潜り、その深さで、海中で穴を掘り、泥と岩を袋に入れるんだぜ、彼らは、日本人野郎が四十年台に、この穴をどうやって掘ったのだと考えもしなかったのかよ。彼らの財務記録を見ると、彼らはこのひとつの穴に百五十万ドルも費やしたんだ。俺は、彼らがレイランみたいな典型的なにせ情報に無駄な金を使うのをやめると、彼らと大喧嘩しなきゃあならなかったんだ。」

カーティスはまた香港での陰口に驚いた。彼らは昔からの友達だと言ったが、テープの記録を聞くと、シンググローブ將軍とシュバイツァー將軍は内心ではいがみ合っていたことがわかる。

シンググローブは個人的に安全対策は引き受けると主張した。彼は自分が

信頼する唯一のフィリピン人は、アキノ大統領内閣の情報担当大臣であるテオドロ「テディ」ロシンだと言った。シンググローブは、ロシンはアメリカ大使ステッペン・ボスワースとも親密な関係であると言った。「コリーは本当に何もやらない」シンググローブは言った。「ボスワースと相談すること無しではね。」

シンググローブは、アキノ政権との合法的な契約書を持っているので、国の所有地も含め、フィリピン国内のどんな財宝隠匿場所も掘ることができると保証した。彼はカーティスに、大統領機動部隊の便箋に書かれウイルフレド・P・サン・ジュアンが署名した許可証を示した。(後日、サン・ジュアンには財宝回収に関するどんな種類の合意書も発行する権限がないことが判明した。)

シンググローブはマラカニアン宮殿の連中、大統領保安部隊、カバイトのマフィアのボス、特別の保安のために左翼新人民軍のゲリラ・リーダーにもわいろを贈った事を自慢した。とても多くの連中が賄賂を受けたので、その噂はひろまった。その結果、大変多くのフィリピン人はニッポン・スターとフェニックスの探索活動のを知ることとなった。

フォリンジャーは知的で理性的だったのに、全部隊には命令を出していなかったとカーティスは言った。そのため、將軍たちに怒鳴りつけられ、黙ってしまったのだ。彼らはフォリンジャーを詰問し、彼を厳しく責めたのだらう。

彼らはせつぱ詰まり、カーティスに自分たちの失敗を何とかするように言った。彼は、どこを掘ったらいいかを教えることが出来たし、そうすれば、彼らも回収分の1パーセントは与えただらう。その謝礼額はカーティスがマルコスから受けていた申し出のように多額である。

まず、最初に彼らは、カーティスに迅速に財宝の回収が出来、マニラとワシントンの信頼を取り戻せる、簡単な場所の情報を与えるよう頼んだ。シンググローブが実際にアキノ大統領からフィリピン共和国の土地で財宝回収をやっているという許可を得ていると仮定して、それはまず考えられないことだが、カーティスは、コレヒドール島の目的の場所をほめかした。彼はそこにいくつかの大きな場所があるし、すでに明るみに出ているけど、簡単な小さな場所もあると説明した。彼らは確かに注目されていたので、許可は絶対に必要なものだ。シンググローブは彼の許可は正しいと主張した。シンググローブはこの回収を達成するために部下を配置した。この時までに、シンググローブは三七名のアメリカ特別軍と、デルタフォース（米陸軍特殊部隊）の将校を呼び寄せていた。彼らはマニラ国際空港に二人、三人のグループで到着したが、偽名と偽パスポートを使って旅行してきた。

將軍たちが作戦を練っている間、カーティスはシボレーの販売部長としてサラリーマンの仕事を再開しにネヴァダへ帰ることにした。飛行機の中で、彼はとんでもない愚か者の船に乗り込んでしまったことに気付いた。シンググローブとフォリンジャーは違った風に魅力的だし恰好よかったが、カーティスは彼らが目的を達成できるかは大いに疑問だと深刻に考えていた。1週間後、彼はフォリンジャーから手書きの手紙を受け取った。彼のコードネーム「ジョージ」の呼びかけで手紙は始まっていた。次の内容は、私が電話で話したくないいくつかの急ぎの覚書だ。ニッポン・スターの取締役会が開かれ、シンググローブは予見される将来のために、フィリピン政府とは関係を持つべきでなく、公にはニッポン・スターから引き離されるべきだと決定した。このことは彼にとって承服しがたいことになるだろう。我々はシンググローブに忠実な投資家による、敵対的乗っ取りに対処することになるだろう。彼はカーティスに、シンググローブの現状行っている三つの金塊回収プロジェクト全てが中止されることになると言った。

ニッポン・スターは、CIA、国防総省、国務省、国家安全保障会議出

身の超愛国主義者（シンググローブやシュバイツァーのような連中）のクラブとして存続する。しかし、その主要な目的は、現実に起こっていることから関心をそらすことであつた。そこで勇者たちは、戦争略奪品の回収を本気でめざし、世界の金市場に売りつける新フィリピン・アメリカ自由基金（PAFF）を設立しようとしていた。

フォリンジャーは、自分たちの回収した最初の相当量の金塊はベンゲット社の買収するために使つたと言つた。ベンゲット社は、フィリピンの一流金採掘会社で、マルコスがマイアミやナツソーに基盤を持つマフィアの助けを借りて、再精錬した戦争略奪品を輸出するために使つていた。ベンゲット社は世界の金市場へ闇の金を動かすためのPAFFのトンネル会社であつた。フォリンジャーは、売上の多くがB-1爆撃機やレーガン政権のスター・ウォーズ計画のような防衛計画の資金供与に使われ、結局、我々が支配する新産軍複合体制を構築したのだ。と言つた。この手紙に添えて、フォリンジャーは、これら全ての連中と組織の関係を示す相関図を描いていた。（CD参照）

この共同事業のフェニックス調査会社とニッポン・スターの相棒として、フォリンジャーはカーティスとその友人、バートン（彼らをC&B引き揚げ屋と呼んでいた。）にこの政治的計画を支援してほしいと言つた。

カーティスは自分のために、是が非でも金塊の回収をして経済的に立て直しをしたかつた。しかし、彼はこの連中と仕事をすることにひどく不安を感じていた。彼はフォリンジャーに、コレヒドール島の映画館の跡地で金塊回収に急いで集中するように説得した。この場所はカーティスが彼らに教えた最も容易で、最も簡単で、最も早くできる地点だつた。数年前なら彼は一人で回収をやっていただろう。この地点はすべて周知の事実で、みんな知っていたので、政府所有地を掘る公式の許可が必要だつた。どん

な子供もそれをやる。しかし將軍たちにそれが出来たろうか。

トップサイドにあったマツカーサー將軍の本部の向かい側に、爆破された映画館がある。映画館のそばの小さな隠匿場所に十八本の金の延べ棒が隠されているはずだ。もしどこを掘るべきかを知っていれば、シャベルで簡単に掘り出せるやわらかい土壌のたった十五フィートの深さにある。十八本の七十五<sup>キ</sup>の金の延べ棒は、数百万ドルの価値があった。カーティスは一九七五年にそのことを知っていた。当時、彼とマルコスはヘリコプターで観光のためにコレヒドール島へ飛んだ。その日撮った一枚の写真をみると、映画館のそばを二人がぶらぶら歩いており、その壁は銃弾を浴びせられているのが分かる。

ビラクルシス大佐はその写真を見た時カーティスに、東京で目撃者から聞いていた面白い話を聞かせた。それは竹田皇子とイチバラ（市原？）卿との会談の時のことである。

目撃者は、日本海軍高級将校をコレヒドール島の本部ビルに訪ねていた、それはアメリカ軍が島を奪還するための攻撃をはじめた一九四五年二月一日の事だったと言った。

大型爆弾が映画館そばの通りに着弾し、十五フィートの深さの爆弾穴を開けた。

海軍指揮官はまだ十八本の金の延べ棒を自分の部屋に置いていて、これはチャンスだと考えた。彼は事務所の職員に、金の延べ棒をその爆弾穴に降ろさせた。近くにあった小型ブルドーザーを使ってすばやく穴を埋めた。数分後、第十一空挺師団と第五〇三落下傘連隊、コンバット・チームの落下傘部隊員が地上に降り立った。

戦闘は熾烈で、ひとりの海軍将校が殺された。

三十年後、目撃者は、爆弾穴は正確にはどこかわからないが、映画館の近くにあったことを記憶していた。

カーティスは、レバー・グループと仕事をしていたときに、コレヒドール島に戻って太平洋戦争記念館を訪れた。ロタンダ（円形大広間）の壁には、貴重なモノクロの空中写真が展示しており、それは一九四五年の爆撃と攻撃を示しており、それぞれは数分間隔で偵察機から撮影されていた。午前十時十六分の写真は、映画館そばの爆弾穴が写っていたが、十時三十八分の写真では爆弾穴は埋められていた。それで、カーティスは例の十八本の金の延べ棒がどこに隠されたかを正確に知ったのである。

この金塊のおかげでフェニックス探索とニッポン・スターは、誠に厄介な財政支援者たちから解放させ、カーティスの知っている他の場所での数年にわたる金塊回収プロジェクトが可能になったのである。

全ての準備が整った時、フェニックスとニッポン・スターから十人のアメリカ人がコレヒドールに到着した。彼らは一緒に周辺を警備するためにフィリピン人の兵士を連れてきたが、彼らは大統領保安部隊から派遣された軍曹に指揮されていた。アメリカ人の中にはフォリンジャー、レーガンの部下のシュバイツァー將軍、五人の大佐、ひとりのアメリカ海軍シール部隊員（特殊部隊員）、カーティスの仲間のデニス・バートンとジョン・レモンがいた。五人の大佐のひとり、エルドン・カミングスは、エル・サルバドルで秘密工作を行ったCIAのベテランだった。他の二人は、ロック、マイヤー大佐、ジェイムス・ヨーク大佐で伝説に残るような人物だった。

シール部隊員は同様に伝説的な人物のトム・ミックスで、GIMCOまたはGEOインナースペースと呼ばれるなどの多い会社に所属し、日本の財宝船の海上での金回収でニッポン・スターと緊密に仕事をした。この連中は重要人物だった。あの日、彼らは全員トラブルに備えて重装備をしていた。映画館地点の回収作業を管理している五人の大佐と別れ、シュバイツァーはマニラ南部のアラバングにある彼らの隠れ家に戻った。

まず大佐たちは地中抵抗性感知機を取り出した。一九八〇年代までに、

感知器は三十フィート下の金塊がどの辺りにあるかを感知できるようある程度進歩していたので、大佐たちは金塊がまだそこに眠っていることを知った。

次の五日以上、彼らは十フィートの深さの穴を掘った。彼らは次の日には金の延べ棒に突き当たることを期待した。そしてその日のあと、突然シューと言う音が聞こえ、三機のフィリピン陸軍ヒューイ・ヘリコプターが彼らの頭上までやって来て、騒音をひびかせた。ヘリコプターには防弾チョッキを来た重装備の兵士でいっぱいだった。二機が威嚇するように空中静止している時、一機が着陸して軽機関銃を持った兵士の一団が飛び降り、一人のフィリピン陸軍の将校が続いた。将校はアメリカ人たちにぞんざいに、自分は軍隊の長であるフィデル・ラモス將軍から、共和国の資産であるコレヒドール島からアメリカ人を放逐するために派遣されたと言った。フォリンジャーは彼に、シンググローブが見せびらかしていた共和国に滞在できる大統領の許可書の手紙を見せた。將軍は署名を見て、「それは本物ではない。サン・ジュアンはそうした許可証を発行する権限をもっていない。」と言った。彼は直ちに島を退去するよう命令を繰り返した。

アメリカ人はテントをたたみ立ち去った。

シュバイツァーは彼の厳選されたチームがコレヒドール島から強制退去させられたと聞いて、怒りのあまり青ざめた。彼はレーガン大統領に電話して、レーガンにアキノ大統領と個人的に仲裁させると脅した。カーティスは、それはよい考えではないので止めるように彼を説得した。

フィリピン政府や軍部の多くの人間が、ニッポン・スターの傲慢なふるまいに腹をたてていた。マニラのジャーナリストは、ニッポン・スターはジョンとジョン・ハリガンによって、統一教会の金で資金援助を受けていたことを突き止めた。

ニッポン・スターがマニラで最初に設立された時、シンググローブは闇市場で武器を買った。その中にはアルマライト製の武器や、グレネード・ランチャー（擲弾発射筒）も含まれていたが、シンググローブは所持免許を取れなかった。それらの武器が盗品であることが判明したからである。彼はまた車をまとめて安く買ったが、その車も盗んだばかりの商品であることが判明した。それらの車は、マルコス秘密警察の長、ファビン・バーの所有であり、彼が亡命した時、車はひそかに売られ、バーはその金を着服した。シンググローブがその車を登録しようとした時、その車は行方不明になっていた政府のものであることが明らかになった。

こうした出来事は、フィリピン上院のジュアン・ボンセ・エンリレと狡猾な詐欺師たちが、ニッポン・スターはフィリピンの島々を踏みじり、国家遺産の美観を台無しにしたと主張したことが物語っている。

一人の熱烈なジャーナリストが次のように書いている。「もし、フィリピンが自由で民主的な社会を維持したいなら、内乱を工作したCIAの深淵に落ちたくなければ、アメリカ軍の武力侵入と配置という局面に備えるなら、そして、アメリカ軍基地の保持を進めるなら、このような民主主義の敵となる運動や活動は、緊密に監視され縮小されるべきだ。」

フェニックスとニッポン・スターがコレヒドール島から追放された時、シンググローブはワシントンでイラン・コントラ事件について議会で証言をしていた。「私はジャック・シンググローブを好んだ。」と、カーティスは我々にきっぱりと言った。「しかし、彼は口を閉ざすことが出来なかったのだ」。

カーティスがフォリンジャーに、自分は共同事業から抜け出すつもりだと伝言した時、フェニックスとエンタープライズの幹部がラスベガスの彼の家に大急ぎで飛んできた。

シュバイツァー將軍とシンググローブも一緒だった。彼らは考え直すよう

に懇願した。ある時、フォリンジャーは内密でカーティスと話したいと頼んだ。二人は外へ出て、エアコンが効いて、ラジオが鳴っているシボレー・ブレイザーの席に座った。

「彼は、なんとしても俺を連れ戻さなければならぬし、さもなければ彼らは、俺を抹殺すると言うんだ。俺は、あんた等はCIAなのかとたずねた。彼は、そんなもんじゃないと言った。彼は、ジオ・ミリ・テックから脅かされていて、俺をどうしても留めなければいけなかったのだと言った。また、アグニューは、彼に厄介な問題を押し付けているとも言った。」

しかし、カーティスは腹を決めていた。その決定的要因は、彼が、アラバングのニツポン・スターの隠れ家は、將軍シユバイツァーとシンググロブと全ての大物がマニラ滞在時に住んでいたところで、その隣家はソビエト大使館のKGB諜報員が借りており、彼らが全てを監視し、録音していることに気付いたことにある。

「我々は全ての窓を開いていた。」とカーティスは言った。「だから、彼らは窓のそばに機械を設置するだけで、無線通信も含めて我々の会話がすべて聞こえるのだ。その会話はその家で解読されたのだ。この件を知り、気が狂いそうになった」。

その後の数ヶ月で、フォリンジャーは何度も何度もカーティスと接触して、彼に考え直すように頼んだ。シンググロブとシユバイツァーもまた電話をした。カーティスは頑として受け入れなかった。將軍たちは自分たちを責めることはなかった。だれもがフォリンジャーを責めたのだ。

その後ももなく、フォリンジャーはマニラに戻る途中にハワイにいた、泳いだ後ワイキキの混んだ道を水着姿でぶらぶら歩いていたが、はだかの

足を何か鋭いものを持つ通行人に切りつけられた。数日後、彼は呼吸困難をとまなう激しい苦痛で病院に担ぎ込まれた。医者は貝毒を疑った。しばらくのあいだ、彼は殆ど虫の息だった。徐々に彼の調子は回復して、マニラの自分のマンションへ健康を回復させるために帰った。そのマンションはジョン・ミトラという名前のフリーピン人と共同使用していたものだった。友人がある朝訪ねて来た時、フォリンジャーは体重をひどく落としていて、呼吸困難をふたたび訴えた。彼は少しの食欲はあったので、友人にイタリア料理を買って来て欲しいと頼んだ。その友人が一時帰りに帰った時、フォリンジャーは発作を起こしていた。彼らは近くのクリニックに飛び込んだ。彼は重症の気管支肺炎で、何か彼の免疫体系をダメにしていた。すぐにもう一回の発作が出た時、彼の心臓は止まり、彼を蘇生させる試みはうまくいかなかった。

ワイキキ海岸での出来事について、カーティスは言った、「アランの仲間のひとりには後に、暗殺であつたに違いないと私に言った。」

ハワイで何が起こったにせよ、マニラの病院の臨床記録に殺人を示すものはない。しかし、証拠がないことが、なにもないことの証拠ではない。

フォリンジャーはたいへんな精神的抑圧の中にいた。精神的重圧はカーティスにも同様に大きな犠牲を強いていた。カーティスが一九八七年七月、サン・フランシスコへ旅行した時、そこで將軍たちと続いていた関係をすべて解消したのだが、ひどい胃の不調を覚え、緊急手術を受けねばならなかった。彼が麻酔からさめた時、ひどくへばらせる鎮痛剤を打たれ続け



ていた。病院での彼の見舞い客の一人は、チャールズ・マクドゥーガルという名の全くの見知らぬ人物で、山下將軍の金塊について本を書いていると言った。元グリーン・ベレー隊員のマクドゥーガルは、フィリピン大学で暫く勉強をし、そこでノエル・ソリアーノ保安局長と親密な友人になったと言った。ノエル・ソリアーノ保安局長は当時アキノ大統領の国家安全顧問をしていた。

マクドゥーガルは病院をたびたび訪れ、カーティスにいろいろな財宝隠匿場所について語った。カーティスは頭がぼんやりした状態で、マクドゥーガルであればソリアーノ保安局長との関係さえ確かなものだと思えば適当な相手かもしれないと考え始めた。彼らはサンチアゴ要塞で、復興計画を装った財宝保管所の探索をするのはどうかを議論をした。マクドゥーガルはソリアーノ保安局長にその考えを切り出し、ソリアーノ保安局長はアキノ大統領と相談をし、大統領は了承した。

彼らは、秩父宮が岩の地下3階にある通風孔の下に隠していた金塊を探すつもりだ。計画はカーティスに率いられた国際貴金属（IPM）と呼ばれた新会社によって行われる。マクドゥーガルも参加し、フィリピン政府が上前をはねた後、儲けを確保する。

掘削は各段階で必要なアキノ大統領の許可のもと、徐々に進められる。彼らは日本人がわからないように置いていた埋め戻しを掘り、ドリルの先っぽで金塊をさぐり、金塊にめぐり合えるよう、そして、彼らが掘削を続けるために必要なアキノ大統領の要求する証拠、つまりコアサンプルを得ることを期待して穴を開けた。

作業は、まる一日中掘り続ける若いフィリピン人のチームで始まり、落盤を防ぐため木製の支柱が組み込まれた。そこには四つのタイプのわながあった。最もはつきりしているのは百、二百五十、五百もしくは千ポンドの航空爆弾で、バネをいじると爆発する。埋め戻しの中に置かれたシアン

化物のびんは簡単に壊れる。いくつかの場所に、簡単に穴の中を水浸しにするテラコッタ（素焼き）の大樽があった。まれではあったが、砂のわなもある、粘土層と細かい砂を互い違いに作られている。もし作業員がそれをいじれば、粘土が崩れ、掘る人間を困らせ、細かい砂はひとを窒息させるだろう。だから、丈夫な支柱は欠かせなかった。

カーティスは、支柱は掘削の進行に合わせて設置しなければならぬと厳しい命令を与えた。しかし、彼は丸一日現場に居ることは出来なかった。金塊にたどり着くための重圧が重なったので、作業者も監督も注意を怠るようになった。ある深夜、トンネルの奥深くで作業をしていた三人の男たちが、支柱の上でかなり動いた。急に砂のわなが破裂した。多量の砂が流れ落ち、二人の男が粘土の厚板のために命を落とした。三人目は、瓦礫の中から足を突き出して、生きて引つ張り出された。

カーティスと保安局長ソリアーノ保安局長は事故の通知を受けていたが、誰も民衆の抗議に備えていなかった。ジャーナリストはサンチアゴ要塞に殺到し、フィリピン上院は調査を要求した。マルコスの取り巻きは攻撃を先導し、死者を出したうえ、「国の記念物を冒涇した」と、カーティス等を責めた。彼は、もう少しで回収できそうな金塊はフィリピンの国家負債の支払いに充てることが出来ると反論した。アキノ大統領は彼を支持した。大統領はIPMにあと九十日間発掘を続ける許可を与えた。

カーティスは金の貯蔵場所にぶち当たるほんの数メートルに居ることを知った。それを証明するために、掘削機を持ち込み掘り下げた。十二番の穴を掘削したとき成果があったのだ。一九八八年、四月二十三日にドリルの先端が金塊、大理石、木のかげらをさぐりあてた。ゴールデン・リリーの地図は、金の延べ棒が大理石の厚板の上の木箱にある事を示していた。カーティスは金脈を掴まえたのだ。

彼の電子感知機が、掘削した穴のすぐ左に小さいが重要な物質を捉えた、それは恐らくベンが言った、最後の瞬間に財宝のつまったドラム缶を埋め戻しに加えたものだ。

数百万ドルの値打ちのシロモノだろう。アキノ大統領はずいぶん喜んだ。

またしても、舞台裏で困ったことが発生していた。資金調達のジョージ・ワートインガー（資金調達人）はネヴァダから自称建築業者、アーニー・ウィッテンバーグ（自称建築業者）と一緒にもどった。ウィッテンバーグ（自称建築業者）の資金は麻薬取引によるもので、後に起訴され、収監されたのだ。ソリアーノ保安局長とマクドゥーガルの二人は最初から、ワートインガー（資金調達人）がウィッテンバーグの麻薬マネーをつぎ込んでいることを知っていたが、誰もカーティスには言わなかった。

カーティスが抗議した、すると、ウィッテンバーグ（自称建築業者）は、カーティスが解任され帰国する条件で、計画の利権を五十万ドルの現金で買取ってやると対抗してきた。

カーティスが金塊の場所を突き止めたとなれば、彼はもはや用なしだった、テレサ2の場合の二の舞だ。フィリピンで金塊の回収を望む金の亡者（投資家）は、誰でもカーティスの力を必要とした。それは彼が地図を持っており、地図をよく分っているからだ。しかし、カーティスが、金塊のあり場所を特定してしまえば、彼は用なしだろう。これは財宝探索の典型で、本や映画「シエラ・マドレの宝」でもパロディ化されている。貪欲は自己中心を増大させ、自己中心は、貪欲を増大させるのである。

「ソリアーノ保安局長は、私に、ウィッテンバーグ（自称建築業者）の金をもらってやれといったのさ。」とカーティスは我々に言った。「でも、そいつは麻薬マネーなので、ビター文欲しくはないんだ。」

ソリアーノ保安局長はその時、カーティスにサンチアゴ要塞の財宝地図を、そしてマニラのとひとつの重要な場所、ボナファシオ橋の財宝地図をこつそりと渡すよう頼んだ。カーティスがきっぱりと拒絶した時、国家保安局長は厳しく非難した。彼はカーティスに、直ちにフィリピンから出て行かないと、アキノ大統領にEPMに与えた金塊探索の許可を取り消させると言った。もしカーティスが協力するなら、ソリアーノ保安局長はカーティスをいざれ呼び戻したであろう。もし彼が退去を拒否したなら、彼は逮捕され、彼に対し告訴状が提出されただろう。顔をゆがめて彼は荷物をまとめアメリカへ帰った。

大陪審証言によると、カーティスが去った時、ソリアーノ保安局長とマクドゥーガルは全面的な協力者としてウィッテンバーグ（自称建築業者）を雇い、サンチアゴ要塞での発掘作業を進めた。チームのメンバーは、彼らが二四本の小さな金の延べ棒、金貨・銀貨、宝石の原石を詰め込んだドラム缶を発見したと証言した。カーティスが穴を開けていた主たる目的物はそこから数メートル下にあった、しかし、彼らは程なくその上に到達したのだろう。

彼らはまた、ボナファシオ橋で掘り始めたが、そこにウィッテンバーグ（自称建築業者）を責任者として配置した。一九四二年に、パシグ川に架かるこの鉄道橋は、アメリカ軍の退却の時に爆破された。橋はすでに落ちていたがその大きなコンクリート製の橋脚台はまだもとの場所にあった。その後に、ゴールデン・リリー部隊はひとつのコンクリートの橋脚台の下に深い貯蔵場所を掘り、おぼけ金庫の中に五十<sup>キ</sup>の金の延べ棒三百四十<sup>ト</sup>分を隠した。（一九八八年の相場で45億ドルの価値である）、貯蔵物ももとのコンクリートに似た厚板で隠された。彼にとって不運だったのは、カーティスは彼のパートナーに、貯蔵庫の側面から掘削すれば突き破るの



は簡単だとはつきりと言っていたのだ。彼がその場所で単独の作業をいつも避けたのは、近くにハイウェイがあり、人目につきやすかったからだ。アキノ政府がタイミングよく、ハイウェイのルート変更をしたので、ウィッテンバーグ（自称建築業者）、マクドゥーガル、そしてソリアーノ保安局長は全ての通りかかる車やトラックに見られることなく、掘削装置を使うことが出来た。ソリアーノ保安局長は公式の許可を手配し、数人の無断居住者を追い払った。

バオンファシ口橋での作業は、カリフォルニアの投資家のクレイグ・ネルソンが、十萬ドルを出して、直径六フィートの穴を開けられる掘削機を持ち込んだため急速に進んだ。

十一月の三十日まで、彼らは橋脚の下、百七十フィートまで進んだ。ネルソンが進行をチェックするためその朝現場に到着した時、彼はアーニー・ウィッテンバーグ（自称建築業者）が大変興奮しているのに気付いた。「ジャップに触ったぞ!」、とウィッテンバーグ（自称建築業者）はわめいたが、それは、彼らが目指すものにたどり着いたことを意味する合言葉だった。

ネルソンは後に証言した。「アーニー・ウィッテンバーグ（自称建築業者）は我々に、エレベーターで穴の下に下りた時、はつきり見える八台の金庫のうち、二つに触れたと話した。」、ネルソンが言うには、ソリアーノ保安局長は発見した金塊を運ぶため、陸軍のトラックを持ち込む腹だった。金塊がたいへん重かったため、一回分として、たった二五本の金の延べ棒がエレベーターで運び上げられた。そこには、六千本以上の金の延べ棒があったのだ。

ソリアーノ保安局長は直ちに太平洋横断電話をマクドゥーガルにかけ、マクドゥーガルはカリフォルニアへの旅行を切り上げてマニラへ飛んで帰

った。翌日ネルソンは言った。「マクドゥーガルが言うには……、私（ネルソン）のことはアーニー・ウィッテンバーグ（自称建築業者）を誤解していたに違いない……アーニー・ウィッテンバーグ（自称建築業者）は、実際には金庫を見ていなかったのだと。」、ネルソンは言う、「マクドゥーガルは、自分たちは金庫の入った部屋にはまだ到達していなかったと主張したのだ。」

ネルソンは自分が騙されていたことを知り、探索場所に戻り調べようとしたが、掘削機の支払いまでさせておきながら、入ることも許されないことに気づいた。すべてのフィリピン人作業員は家に帰され、橋周辺の警備は二人の重装備したアメリカ軍特別部隊に引き継がれていた。二人はマクドゥーガルの知人で、一人はこの警備のために通常任務から休みを取っていたと言われている大佐である。マクドゥーガルはすべての関係者に、水が穴に溢れてしまったのでこの計画をあきらめなければならなかったと言った。

リザル州の警察局長であるキャンソン大佐によれば、マクドゥーガルに二台の軍務トラックをあてがったのは、一九八八年一月二日から六日までの五夜、深夜から朝の五時までである。他の情報筋によると、多くの装甲車もまた参加していた。目撃者は、トラックと装甲車がボナファシ口橋からサンチアゴ要塞へ大量の荷物を運び、そこで荷物がバシグ川ではしけに乗せられたと主張している。その後、マニラ国際空港の保全倉庫で三百二十五トンの金塊が売りに出ているという噂がひろまった。計算と合わない金塊は十五ト以下だった。

回収事業に関わった残党たちはお互いに攻撃しあった。資金調達者のジョージ・ワーティンガーはネヴァダの連邦大陪審で、総計百五十萬ドルの麻薬マネーがアーニー・ウィッテンバーグ（自称建築業者）によって、皆や橋での掘削作業につき込まれたと証言した。

ワーティンガー（資金調達者）は、「マクドゥーガルとソリアーノ保安局長

のふたりとも麻薬マネーだと承知していたさ。マクドゥーガルは、いいかい、これがマスコミに流れたりしたら、……ソリアーノ保安局長はまじいことになるよと、と言ったんだ。麻薬マネーだったさ。私が言っている意味は、海の向こうのアメリカでマスコミにもれたら我々ははりつけになつてしまふ、ということだ。」と証言した。

実際、マニラの新聞が、ウイッテンバーグ（自称建築業者）の麻薬マネーの幾ばくかがソリアーノ保安局長の個人口座に移されたと報じた時、アキノ大統領は一九八九年二月十五日付けでソリアーノ保安局長が国家安全顧問を辞任するよう要求した。ウイティンガー（資金調達者）はまた、ウイッテンバーグ（自称建築業者）は、マクドゥーガルがマニラに買った新家屋に備える家具の五万ドルの支払いをし、マクドゥーガルがサン・フランシスコに買った新家屋のために資金援助をしたと証言した。

そして、ウイティンガー（資金調達者）は、ウイッテンバーグ（自称建築業者）はまた、ソリアーノ保安局長とマクドゥーガルそれぞれに現金五万ドルを与えたと証言した。それから大陪審はマクドゥーガルを召喚した。

政府の検察官はまず、マクドゥーガルのサン・フランシスコにある新家屋の没収を要求した。しかし、マクドゥーガルは司法取引で、彼の事業パートナーについての報告書を準備するよう説得された。マクドゥーガルの証言に負うところが多いが、ウイッテンバーグ（自称建築業者）は裁判を受け、麻薬売買のかどで終身刑の判決を受けた。

映画「黄金」（シエラ・マドレ山の財宝）のハンフリー・ボガートや相棒たちのように、すべてのこれらの男たちは金塊に取り付かれ、お互いに攻撃しあつた。

しかし、その場で預金として金塊を受け入れて、手品師みたいに金塊を消えてなくした国際バンカーに比べると、彼らは取るにたりない雑魚みたいなものだ。

（訳注、この章は人名がややこしいので、大変わざらわしいとは思いま

したが、ウイッテンバーグ（自称建築業者）、ソリアーノ保安局長、ウイティンガー（資金調達者）について、あえて区別をつけるため属性を書き込みました。